

沖縄こどもの国ワークショップ 報告

海を、もっと身近に。

2日間でわかったこと、これから

チームイルカ 最終発表



話すこと

やったこと・こけたこと・これから

1

沖縄こどもの国って、どんなところ？

会場と、そこに来る人たち

2

当初やろうとしたこと

企画の最初のかたち

3

2日間で、実際に起きたこと

1日目のカオスと、2日目の立て直し

4

そこから学んだこと

子ども・年齢設計・伝え方

5

これから

次のワークショップへ

沖縄こどもの国って、どんなところ？

動物園＋体験型ミュージアムの複合施設



会場

ワンダーミュージアム。展示に触って遊べる、体験型のスペース

来る人

親子連れが中心。未就学児～小学生が多い

今回の形式

常時開催型。出入り自由で、来た子から参加してもらう

だからこそ

「誰が来るか」を選べない。年齢も人数も、当日にならないと分からない

当初やろうとしたこと

コンセプトは「海をもっと身近に」

目的

海を身近に
感じてもらう

対象

中学生くらいまで

内容

積み木 と スタンプ
で自由に表現

形式

常時開催
(出入り自由)

ねらい：インプットは軽く、あとは子どもたちに表現してもらう

- 積み木＝海の問題を解決する「夢の機械」をつくってもらう
- スタンプ＝海の中を、絵とスタンプで自由に表現してもらう
- 自分たちが調べた「地域連携」や「生態系」の話も伝えられたらいいな、と考えていた

1日目：カオスだった

起きたことを時系列で



何が起きたか

- 人はめちゃくちゃ来た。興味は確実に引けていた
- でも、積み木とスタンプの間を子どもが行き来してしまい、場が回らなくなった
- 企画の趣旨を、一度も説明できないまま終わった
- 子どもたちは「積み木がある」「スタンプがある」から来ていた
- 運営側の負担が、とにかく大きかった

1日目：反省点

後から振り返ると、3つあった

1

趣旨が伝わらない

「積み木があるから」「ロボットという単語に釣られて」来ていた。企画の意図まで届かなかった

2

積み木が難しすぎた

思ったように作れず、結局タイヤの部品で車を作るだけになってしまう子が多かった

3

保護者が傍観者に

「学生が子どもの相手をしてくれる」という受け取られ方。スマホを見ているだけの方も多かった

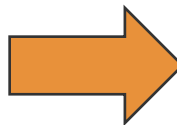
結論：子どもは来た。でも「何をしに来る場所なのか」を、こちらが伝えられていなかった。

2日目：やり方を変えた

絞る・受け入れ口をつくる、の2点

1日目

- 積み木 と スタンプ を同時開催
- 受付なし。来た子がそのまま参加
- 誰が何人来たのか分からない
- 場が回らず、趣旨を説明できない



2日目

- スタンプだけに絞る
- 受付を設置。名前と年齢を聞いて画用紙を渡す
- 何歳の子が何人来たかを把握する
- 一人ひとりと会話しながら進める

2日目：できたこと



できたこと

- 人数がちょうどよく、しっかり対応できた
- 趣旨に沿った形で開催できた
- 子どもたちと会話ができた
- 海外からの参加者もいた（中国からの方が多かった）
- 未就学児でも小学生でも成立する内容だった

子どもとの関わり方

制御はできない

エネルギーと集中力

一度火がつくと、とことん向き合う。

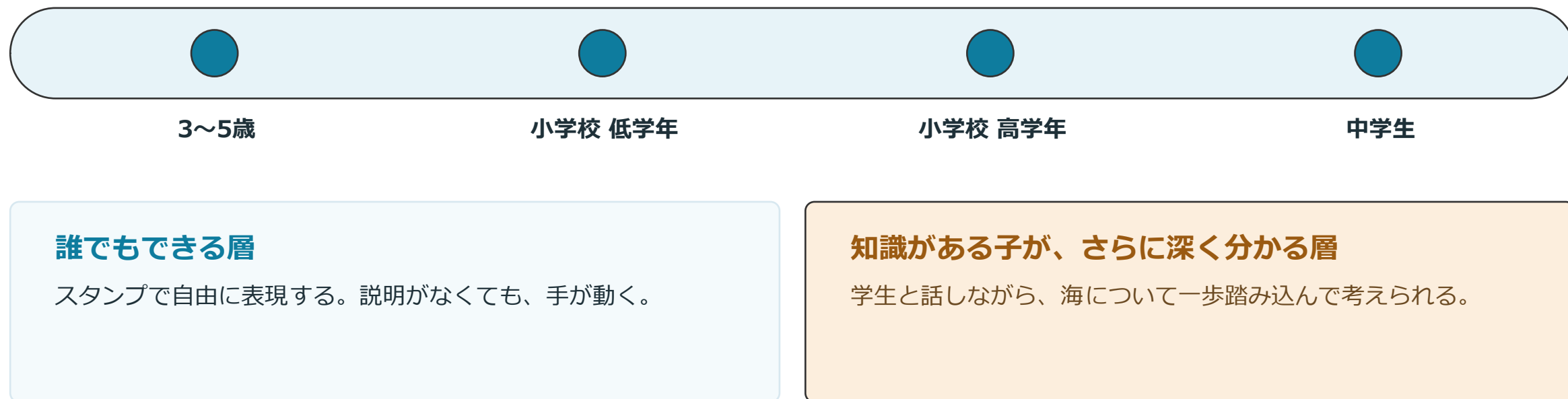
次の課題

その勢いを「もっと知りたい」へどう繋げるか。



学んだこと 02 : 「誰でもできる、でも深く分かる」

一つの企画で、幅のある年齢層をカバーする



この2層を1つの企画に同居させられるかどうか、常時開催型のワークショップの分かれ目なのでは。

学んだこと 03 : この場に合っていたのは、どっち？

「海洋リテラシー」と「海を身近に」

海洋リテラシー

知識として、海のことを正しく理解してもらう。
→ 今回の場では、ここまで届かせるのは難しかった。

海を身近に

海って面白いかも、と思ってもらう。
→ こどもの国という場には、こちらが合っていた。

気づき

- 保護者も、子どもの教育に「海」を入れたいとは思っている
- でも、子どもを通じて親に届けるのは、年齢層を考えるとあまりに遠回り
- 本気で保護者に届けたいなら、保護者への直接アプローチの方が現実的

反省

手応えを、こちらが測れなかった



内容がかなり子ども向けになった

常時開催・年齢バラバラという条件の中で、扱える内容が限られた



効果の是非が、測りにくい

楽しんでもらえたのは確か。でも、それが何に繋がったのかが見えない

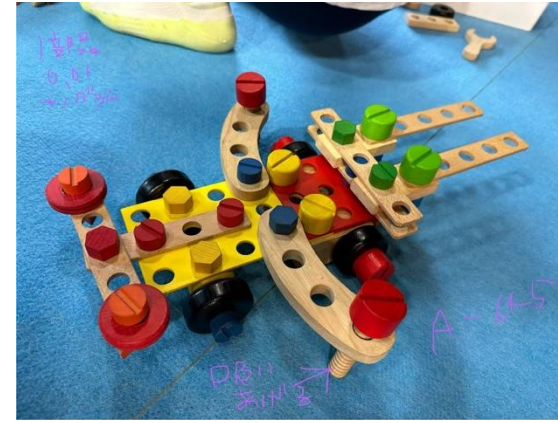


こちら、伝わったかどうか分からなかった

子どもたちが何を考えていて、何が伝わっているのか掴めなかった

だから次は、もう少し「具体的な中身」を扱うワークショップにしたい。

こどもたちの作品



これからやりたいこと

今回のつながりと、反省を持って

1

子どもの好奇心を 設計の軸にする

「教える」ではなく、
子ども自身の“知りたい”
を引き出す組み立てに

2

小学校の学活の 時間でやる

2日目に出会った
小学校の先生の協力で
実現できるかもしれない

3

こどもの国で、 対象年齢を上げる

講義形式に近い
ワークショップとして
もう一度挑戦する

扱いたい中身の例

海流はどう流れているのか / 山の栄養が、川を通して海に届くまで / 赤土が流れ出すと、サンゴに何が起きるのか

つながり

沖縄の小学校 × 大学生 | 新しいつながり

最終日の最後

親子との出会い

最後に来てくれた子のお父さんが、
沖縄の小学校教員・松田さんでした。

松田さん

小学校教員

「大学生と一緒に、
総合的な学習の時間をつくりたい」

NEXT ACTION

授業実現に向け、一緒に打ち合わせ

内容 役割 時期
実施までの進め方



※許可済

この企画の、社会的な意味

海洋環境の学びを、学生自身のアクションへ

**20年の歴史で
前例のない実践**

沖縄唯一のチルドレンズミュージアムで、
学生が企画から実施までを担った。

1 学びを、行動に変えた

海洋環境について学んだ学生が、
未来へのアクションを自ら形にした。

2 多世代に対話を広げた

子どもだけでなく、保護者や来館者とも
「よりよい未来」を考える入口をつくった。

3 次の課題が見えた

専門知を子どもの体験へ変える方法と、
大学・ミュージアムをつなぐ支援が必要。

今回の価値

成功・失敗で終わらず、次の実践に必要な「橋渡し」を見つけたこと。

自分が学んだことを 話すだけの会にしない。

- 主役は、参加者の「知りたい」の方
- そこに、具体的な中身をどう乗せるかを設計する

ご清聴ありがとうございました。

